

臍の宿替卷之二

商内好

兎角商賣は精出さにやならぬ物ぢやて、何が面白いといふたどて、代呂物の賣れるほど氣の好いものはない、其内にも利は元にありといふて、賣先よりは買先が大事じやよつて、おれは職人でも何でもヘイ、いふてやると、餘所などよりはぐつと働ってくれるよつて、元もやすふに仕入るおかげで得意も自然とふへて、凡十年ほどの間に、よほどの金もうけを仕たはずじやが、そのわりにまうからぬよつて、段々と帳を調べて見たが、悪をくれん先計じや、是ではつぱりあきなひせん方がよい、

放蕩好

今日喰物も喰はずに、働いて金を延した所が、一生その金で心配せんならず、どちら道生を送るのならば、己のやうにうまい物は喰は、面白い物は見ると、姫はおよそばん／＼といふじやないが、マア惚れる惚れんは二段にして、廣い大阪京江戸東西南北に、ありとあらゆる賣女

に、おれを知らぬものはないといふくらゐで、今では世界中の粹が、おれ一人にとゞまるといふもんじやて、かうなつて見ると、のちの方がよつほど徳じやけれど、門をあるくの借のある奴にあやせんかと思ふて、ひや／＼する、

舞 好

コレ／＼おつゆ、どこへ行のじや、サア御師匠所でならふてきた通りを、直ぐにさらへておきなされ、サアよいかへ、そのやうにわき目せず、正面をきつて腰をちやんと延して、イ、エさうじやないがな、扇をかう翳して、イ、エさう／＼手をもつと延して、サア合の手がすんだらヤア、うた「チン／＼ひイよテクラのヲ、てふのヲ、サアそこで、ちらへ廻つて、うた「よねんなく、さう／＼それでよいのじや、浦島ではこゝが肝腎の處じやよつて、忘れぬやうに仕なされ、何んでも舞は子供のうちにおほえて置ぬど、生長なつてから風俗がわるいといふよつて、随分替古して、ひよつと男と欠落でも、道行に耻かゝんやうせんならんぞ、

戲 談 好

ア、もうちやつとかはつてある、又今度も面白さうなア、こちらの赤面は誰ぢや知らん、ソレ

おきよどん、ソレ見なされ、こゝでお姫さんが惚れる所でおますがな、上の方のどのさんが政治郎か知らん、「何のさうじやないではナ、米藏の紋がついておますがナ、何の米やんが、政やんお辭儀しますものか、「オヤそれでもこゝでも見なされ、米やんは下に居ますけれど、政やんは、座敷に居て家來がたんと付ていますてい、「そりや芝居じやよつてゝおますがな、此お子はすかんお子じや、今度からモウおまはんにものいやせん、

戲場好

マア世の中に芝居ほど面白い物はないテ、上は天子將軍のことから、下は万民のことまで、むかしあつた通りを、目の前に見られるといふ物は、芝居にかきるデ、尤も其内に勸善懲惡を示して、一日の早學文とは、よういふたものじや、しかし見物もたんとあるが、みな役者の男まへ計喜んで、ほんまの狂言を見分る者はないが、まアおれなどは幽霊場の道具立じやないが、舞臺一ぱいに黒いといふもんで、岡島やのは入はこういふ工合は井筒屋の出はこんな癖ど、(いろく仕方する)ことくくしつてゐる者はないデ、それじやから一度は役者の草履持てこんど、ワからぬ事じやデ、

淨 瑠 璃 好

上るりは音曲の司といふ筈じや、これほど理窟のつんだものはない、そこで三都はいふに及ばず、どんな田舎へいても、上るり計りはワからぬ國はないといふくらゐで、同じなぐさみの替古するにも、若いものでも、としよりでも、やれるものは此上るりじやテ、それに何も知らぬ奴らは、ちつと語やうが悪いと、味噌か酸なるの、漬ものが腐るのといふけれど、ついにそんな事は知らんが、己が憂へ場を語ると、聞者が悲うなるのをむつとしんぼうしてゐても、これへられぬか、いつでも止てくれ、聲上ると云ふのサ

仲 居 好

同じ奉公するのに、アノ町で奉公する子は、どんな氣やじ知らん、たま／＼お金もちふのは、嫁入の祝義持て行くが、よつほど氣のつく内でなら、半季に半襟の一つくらゐはもらへるが、芝居見るかとして序の幕一切が切狂言二幕より見せてはくりヤせん、それから見ると、色町に奉公する方かよつほどよい、マア芝居はかかる度に見に行し、色事は表向にできるし、うまい物は食べ次第なり、三日に一べんくらゐは、御客に一朱の一つもらふし、こんな面白い奉公はあ

りやせん、是で毎晩反吐の掃除が無つたら、なと思ふぞ、

婢好

アノ竹どんは、たしか口入屋で見たお子じやが、内の別家の八兵衛さんどこへ行ってゐつたの
 じやなア、同じ奉公しても、わしは本家筋へ来たよつて、お竹どんに逢ても、ハイ云いで
 もよいのじや、そしてお家さんのお供して歩いてゐると、お辭儀する人ばかりで、内にゐても
 何でも、娘さんの通りにしてもらへるよつて、こんな嬉しい事は有やせん、今でも親の内に入る
 たなら、質おきにいたり、米買ひにいたりせんならんけれど、奉公仕てるお蔭で、米の直も知
 らんが、蒸し立のお芋が門で喰べられんたげに不自由な、

怒し好

今日ほどえらい面白かつた、先始に十兵衛の所へいてやつたら、精出して念佛申してゐたよつ
 て、佛法の悪口から、糞坊主にたまされていふ念佛じやもの、極樂の爲所か、屁にならぬとい
 ふたら、發りよつたが、それから虎この内へいた所が、碌でもない冠陰で、氣違ひに成ていた
 所へ、おなじ風流ことでも、發句俳諧なら任てもよいが、笠附は俗物かするものじやといふた

ら、こいつもあこりよつて、また戻りに金さん所へよつたら、大根賣を呼んで、無三向に直切てゐるのを見て、そんな物買はずと、いつもの通り捨に行といふたら、これもあこつたが、えらい面白いかはりに、丁度三軒あすびに行かれぬ様になつた。

悦し好

アハ、ハ、此間よこ町の縫物屋で娘の子がよつて芝居のはなしがゑらはづみの所へ往てだれか
 れなしにひいきの役者をめつたむしやうに響てやつたらみながうつゝになつて悦んだ所から中
 の芝居ならよひがほじやよつて場の一間ぐらいは何時でもはりこみ升といふたら又うれしがつ
 てそれから二三日すると二三人着物きかへておれどころへ出かけてきたから今さらうそじやと
 もいわれず嫁にはしかられ差當てことはりの云様がないので用急で夕から京へのぼつたとか、
 にいふてもらふたに依て晝はうか／＼門も歩かれず中の芝居の仕まふ迄は二かい住居している
 のじや。

娜身好

まアこうして歩いてゐても、己ほど何處も彼處も揃ふて、粹な風してゐる者はないテ、此羽織

も今日(けふ)は着立(きりだ)じやよつて、見せてやりたし、又煙草(たばこ)入(い)るも五六兩(ごろう)も出したよつて、是(こゝ)も見せて歩きたし、羽織(はori)着(き)てゐれば、煙草(たばこ)入(い)が見(み)えず、煙草(たばこ)入(い)見(み)せうと思(おも)へば、羽織(はori)が着(き)られず、襦袢(じゆばん)の緋縮緬(ひぢくめん)も見(み)せたいけれど、それでけ着(き)るものも脱(ぬ)がんならん、もう姫(ひめ)にすかれうと思(おも)ふと、誠に氣(き)がいそがしい、しかし月代(つきしろ)の延加減(えんかへん)といひ、髪(かみ)のゆいやう迄(まで)、どこに愚(おろ)はないといふ風(ふう)じやが、どんと色事(いろこと)かでけぬが、兎角(うさぎ)女(に)は心得違(こころちが)ひをするものじや、

不構好

からだやつして、いやみして、姫(ひめ)の惚(ほ)るものならば、誰(たれ)でもやつして見るけれど、そいつはどうしても水(みづ)くさいで、そこで、おれ(おれ)の様に風呂(ふろ)は月(つき)に一度(いちど)、髪(かみ)は十五日(じふご)目(め)と極めて、着物(きもの)の着(き)かへば、年(とし)に三(さん)べんと定(さだ)めておくと、まあ第一(だいいち)物(もの)が入(い)らぬ上(うへ)に女(に)女(に)が惚(ほ)れても皆(みな)しんから腹(はら)に惚(ほ)てきをるじや、何(なん)でも腹(はら)に惚(ほ)て來(き)るやうにせんと、ほんまの色事(いろこと)じやないて、そこで、身(み)を構(かま)はずに腹(はら)うつてゐるが、今(いま)として十二三年(じふにさん)になるけれど、まだ一人(ひとり)も惚(ほ)ぬが、是(こゝ)では腹(はら)ばかりでもないか知らん、

妾好

今時はなんぼよい所の娘さんでも、器量がわるければ、出世もできず、又一生氣がねせんならんけれど、わしらはみつとむなふ生れてこんなんだおかけて、こんな樂な暮しが出来るのじや、モウかうしてゐると、欲しい物は旦那にいうつて買ってもらふし、寝よと起よと、晝は氣まゝに暮して、喰べたい物でも、見たい物でも、夜さりあんじよう勤めておくと、何でもでけるといふは、これほど能い事は外にない、その内にもいやなこといふたら、旦那の聲面と、お尻を勝手におとされんばかりじや、それでも今では絹の丹前着て、夜番にいけるといふて、お父さんが悦でくれるも、みな私のかげぢや、何でも女は道樂がよい、

本妻好

此間ちよつと聞たら、向ひのお安さんは、隣の吉さんどわけがあるとかいふ噂じやが、マアあのお安さんも、亭主をもつてゐて、どんな氣でそんな事がでける知らん、それと思ふと、わたしらはよつぽど阿房じや、内の人はいつても餘所でもまつて來く、ちよつどのふく、ぼん／＼いはれて、大躰つまらんものじやない、それでもあのお方より外に男を捨らへた事がないよつて、あやまつてゐるけれど、折には腹が立て、どむならん、それでも外に男をこしらへる様な氣は出やせんけれど、お安さんの様な事仕てゐたら、ほんまにおもしろかるとおもふよ、

話 好

詔といふ物は五音に通し、律呂の調子に節を付たるものなれば、余の音曲とは違ひ、天子將軍の御上覧にも入て、太平を舞うたう曲なれば、その心得にて心を落付、靜に謠ひなされ、サア昨日の次でござる、ウタヒ其上一とせ渡邊福島を出し時は、以ての外の大風なりしを、我君御舟を出され、平家を亡したまひし事、今もつておなじ事ぞかし、急ぎ御舟をいだすべし、(このとき表の戸を明て)ヘイ御免、割木屋で御座ります、お拂をもらふて歸ります、ウタヒげに、是口斷りなり、どうぞ今日はもらふていきます、

歌 諷 好

一こそ二ふしといふけれども、聲がよいばかりで、節のころばぬうたは、一寸と一口ぐらゐは聞れるけれど、うたの一番もやると、さつぱり調子をはづしてしもふものじや、そこで先づ己の聲は、舞臺調子といふて、何番うたふても聲がかするの、イヤ火か出るのといふ事はないよつて、どこのさらへにでも、己か行ぬと始らぬじや、又七本や八本位、調子は、鼻唄様のものじや、しかしあんまり聲の、よけでるのも難儀なものじやて、笛ふき迄かよわつて、あんたの

歌には合されませんといひをるで、

講釋好

コリヤ倅せがれ、どうしたものじや、わりやマアちやらくらくした落咄おとしはなしや、芝居しばふのやうな馬鹿ばかげたものを見たりせずと、ひまがあるなら講釋かうしやくを聞に行け、講釋かうしやくといふ物は、忠臣孝子の實錄じゆんしんかうし、智勇ちゆうゆう武略ぶりやくの軍談ぐんたんなどは、聞てあげば後學こうがくの爲ためになつて、己おれのやうな極道ごくどうにはなりやせぬ、先づよつく承うけたまはれ、近來きんらい米穀まいこく諸色しよしき高直かうちゆうなるに従したがひ、予よが家運かうん日々日々おどろへ、一家一門いつけいいちもんは先に借倒かひたふして不和ふわとなる所、買かひがり借金しやうきんがた今城廓いまじやうかくを十重二十重じゆじゆじふじゆに取圍とりにこみ、催促さいそく櫛くしの齒はを引ひか如ごとし、斯かては日頃ひびらの智畧ちりやくも盡はき果はつ、もはや當季とうきは一先家請いちせんかじゆ小屋こやへ引ひとらんと思おもふ、如何いかに(ムスコ)一寸いちゆん一寸いちゆんくくしまして、

落咄好

これ／＼おのれはマア親おやに似にねやつたナア、何時いつでも眞面目まじめな顔かほして、烟草たばこばかりすつば／＼と喫のんで居ゐるが、なんぎな者ものじや、たま／＼己おれか叱しかると、理窟りくつばかりぬかして、今時いまときの人間じんげんじやないがな、己おれを見みいやい、此通このとほり齡としがよつても、粹じゆんじや、面白おもしろい人ひとじやと、何處どこへいつても

いはれるのは、落しはなしが上手じやよつてじや、われもそんな堅苦しい本を見て居ずに、ちつと落咄に凝つたがよい、まだ若い年をしてゐながら、一寸といふ事が尤な事ばかりで、それでは此家の和綴かでけません、今度から己の様に、馬鹿を言ならはぬと世が渡れんど、

子好

これ／＼竹松や、そのやうに無理云ふと、御父さんが灸すゑてじや、竹はもうちよつとも無理云ふてやしません、おとなしう仕て居ます、オ、それ向ひのおばさんが笑ふてゐてじや、あゝよい／＼／＼、それ／＼／＼、まあお光さん聞てお呉れなされ、モウこの子はどむならんのか、賢いのか、そうに智恵があつて、今も内で二親をあきれさしますのよ、それに此頃は口が達者になつて、何にも見せらりやしません、今朝起ると隣へいて、あどつさんとおかあど夕べ馬かけの誓古したは、イヤわし所は着物で銭買ひに行くのじやなぞといひますのじや、

嬢好

あのまア隣のち梅さんわいな、毎日／＼子で氣遣ひじや、ようまアあの様にしやべつて、口かだるふない事じや、ワしら一口もいや／＼、子程うるさいものはない、其を思ふとわしの様に

かうして後家でくらすほど、氣樂の事はない、どんな事しても、亭主に氣かねはなし、子でやきやき云ふ事はなし、そしてあんまり不細工にも生れてこなんだよつて、ぐるりから世話のやきてはたんとあるよつて、なんにも不自由は知らんけれど、男の人が出入する度に、きん所へ氣がねするのと、月の物がなにかしらんと思ふので、是が誠に心配な、

雜客好

エイサヨこりや〜、ちよウ〜ようさじや、ヤレ〜〜どえらい面白ナア、えらそうな顔して内に居て、陰氣に暮しても一生、おれの様に飛上つても一生じや、同じ暮すならあはてる方がよつ程徳じやて、マア此前の大地震でも、あはてた計りで助かつたけれど、散財に行と藝子の三味線折てまどはされるのと、外へ出ると物落して來るにはよわるで、

氣長好

何じや火事カナ、それはいやな事じや、まあ火元はどこか、何も急ぐ事はない、俵一つ焚ても、烟草三ぶくや四ふくは喫間はある、まして家の焼けるのじやもの、茶づけの五六ばい喫間はあるで、嫌いら〜云はずと火鉢へ土瓶かけてくれ、腹がへつては向へいても働くことが出來ぬ、

コソ／＼その様に炭を餘計入れてどうするのじや、モウ吹いても、ちこる時分にはちこるものじや、何の己一人があはてゝいた所か、火が消るものじやなし、マア此陣笠の紐も切ぬ様に見ておくじや、ア、モウ半鐘を打て来た、それ見い嫌あはてるのは損じやてな、

上戸好

こりや我の様に酒が呑ぬは一生の損じや、ちつと呑習ひなさい、酔て云ふではないが、酒呑ぬやつは酒を見て氣違ひ水じや、何のとぬかすが、さうじやねエソ、酔ていふじやないが、酒の酔本性を忘れずといふて、常に腹に思ふてゐても、いゝにくい事は酒のむと皆云ふて仕舞もんだ、そこで氣違ひ水てはない、正直水やじと云ふのじやが、何とどうじや、酔ていふのじやないぞよつてに、ちつと酒も呑ならへ、是見ておけ、己の頭にこのくらゐどえらい疵が付たけれど、酒のんでゐたおかけで、其時は痛いことなかつたワイ、

下戸好

およそ酒のみほど、卑しい者はない、歴々の立派な人でも、呑たひ時に酒の座を見せると、飢饉年の乞食に施行見せるか、蟻の道に砂糖とぼした様に、ぐるりからよつてかゝつて是程見苦

しいものはないてや、日本は禮儀正しい國じやと云けれど、祝儀事に酒を吞すのに、手をもつて引ずり上たり、のんだ上ては氣のはる座敷でも喧嘩をしたり、反吐を吐たり、寐ころんだりするほど、亭主も我も悦ぶとは、丸で氣違見たやうなと唐人が笑ふさうなか、誠に酒香は日本の疵じや、しかし己のやうなも鹿相の言譯がでけんテ、

地歌好

あのマア隣のお松さんは、毎日々々朝から晩まで、ばちくどやかましい、それも何ぞ満足の歌替古するなら聞てもゐられるけれど、今時はあんな娘の子に江戸歌ばかり習はして品わるい、丸であばづれを教へる様なもんじや、マア年かいてから、どんな所へ嫁入さす氣じや知らん、逆もよい所へ行きやせん、何でも女の子は、法師さんに習ふた歌でなければ、餘所へいて耻をかきます、わしらは十三の年にさらへ講に出て根引を松竹梅を引たが、長う三味線もたぬよつて、ちつと出して見ませう、ウタマア引えエーがアすウミー、引ア、何じや眼たい、

江戸歌好

オヤくお竹さん、おまはん此頃は替古にお出ないのや、竹あのなア私所のおばさんが、江

戸歌のやうな品のわるいものならはすと、道樂女子になると云ふて、止にさしてもおまして、昨日から菊崎さん所へいて、地歌習ふてみますのでいな、師オ、すかん地歌習うて、どうせうと思ふてじや、まだいん氣な江戸歌の方が、陽氣でそしてわたしの様に歌の數たつた十程知てゐても、お師匠さんになられるし、乞食になつても不自由しやしませんハナ、

散財好

よう思ふて見ると馬鹿の様なもの、散財ほどむづかしいものはないて、何でも藝子に惚てもらふ積りては、とてもいかぬよつて、兎角己の様に歌妓子供は金を遣て遊ばしてやらうと思ふど、何でも無事じや、まあ是迄大分お茶屋て苦勞したお蔭で、今色町中の藝子に己を知らぬ女は、あつちがちつと耻かく位になりてゐるよつて、是でこそ錢遣ふた直打があるのじや、どの位にえらさうな顔してゐる女でも、金でなければいかんで、そいつを此方にて承知してゐるよつてに、己の粹がぐつと立のじや、しかし此月はあの頼母子が落てくれんと、さつぱりどもならんテ、

娼妓買好

お茶屋へ行ながら姫買せずと、散財だけして無三向に粹がつて銭を取られる奴は、ど云ふ氣じや知らんて、姫買は野暮じやの不意氣などいふけれど、どちら道茶屋へ来るからは、女好で来るださうじや、よつてつまらん藝子して金取れるよりは、己の様に姫に惚られる方かよつぱと粹の骨頂じやて、何故といふに、姫はどの客でいても、身をまかさんならんやつを、其内にしんからの色事するのじやよつて、大轉程うるのにむづかしい事じやないで、そこで今夜の女郎もよつばと来てゐるか、しかし長い手水じや、

陰氣好

やれ〜どうやらかうやら世間が静まつた、もう晝の中や宵の間は、兎角さわがしうて本を見ても、どんと心に入らぬが、かうして夜が更ると、わしの世界じや、何が面白と云たどて、本を見るほど面白い事はないで、誠に昔物知りが浮世に倦て、山へは入しやつた筈じや、己の様に書物を見てからは、どんと此世がうるさうてならんじや、いつそ明日からどうぞ閑靜な山へ行たいが、一人では自不自由なよつて、内へ參る逮夜坊主と駈落せうと思ふ、

氣短好

エ、何じや、向の方に大勢立て往來が出来やせんがな、此せはしい節季に門芝居か、面白いな
い、むかへするワイ、エもう此筋行くどひまが入るよつて、こちらの辻から廻つて行が、こ
んな事してらうちに、段々後れる、エ、腹が立て氣かむしやくしやする、これへ重兵衛さん、
何をしてゐるのじや、紋付の羽織着て、懸取とはどうじや、イヤ明日禮に行處ど、懸取行先と
同じ處じやよつて、一所にいて置ますのじや、そして明日は何する積じや、明日の朝から天満
の天神から番場へいて、今宮廻つて、十日戎と初て神と初午を仕舞て置ますのじや、

臍の宿替卷之二終

諺臍の宿替卷之三

人のかすり取る人

「モシ作さん、おまへ何じや買物にいてくれといふてじやあつたが、丁度よいついである、一所に、いてこうか、ア、よし／＼、そんなら此一步で蠟燭と鯉節か、直ぐにいてきて上る、まアうまいは此一步の内、で三百文はかすりかどれるは、今朝から方々でかすり取たけれど、まだ五六十よりなかつたが、此人のかすりは大ぶんあらいよつて取たへがある、しかしあまり取たら、はげるとどむならん、マア此くらゐにせう、

人のかすり取る人

「作さん、モウ奥の坐敷の方から来い／＼といふて呼でやけれど、アノ御客はどうやらすると季節がむつかしいよつて、はん可厭でヘナ、そしてあんなの事をいつでも悪口いふて、誠に聞きづらいテ、こんなといふておくれなエ、此子アよい衿わいれ、あんな頼母子の落たかね、どうしなさつた、アノ金のあるうちは、わたしもこのえりをはなしやせんでエな、もつとつかひ

なさらんか、

咽の下へは入る人

「イヤア作だんな、あんたはえらい此間お察しの通り、むかうからあんたに悉らのろけ、アハ、
、、、、さすが通人じや、モシ氣が大きいと咽迄が太どござりますぜ、モシいにしなに羽織と
煙草入、そいつはありがたい、サア何でもあんたでないどとむならん、アハ、、、、

鼻毛よむ人

「作さん、わたいはなんでこないにおまはんに惚た知らん、内に居ても一寸も外の事おもふた
ことがない、どうぞ御召の上着と長襦袢とこしらへてもらをとおもふて、そればかり樂しん
でゐるのでエ、サ、イヤおまはんの眉毛は、せんどからよんでわかつてゐるけれど、まだ鼻毛
はよまんよつて、一べんよましておくれ、

「さう知られてはどむならんがな、賣て尻の毛だけは残してくれ、

尻喰ひ観音

「あのれはくにくい奴じや、物を買ては錢を拂はず、借て來た物は返すといふとはなし、頼れたことは其儘にうちやつておいたり、何でも出したら跡をかた付るといふことのない道落者じや、其上誰でも人を穴くらしいに仕ておくよつて、皆が尻くらしい觀音じやくといふが、何でおれにそんな悪名を付て、名をかたりをつた、チ、よいは、尻くらしい觀音なら、くわんのんでおれが尻を喰て見てやる、コリヤどうじや、モウ尻くらしいにしやせぬか、チア道らくをやめるか、エ、くそぎたない穴じや、

男「ア、いたいくく、さうかぶられてはこたへられぬ、モウ道落はさつばりやめます、どふぞ許して下さりませ、さう尻をくはれてしもふたら、又この内に尻がすわりません、どふぞごめん、

油樽あぶらたるに犬がつく

犬「これくちまへ何處へ行くのじや、わしも付て行く、ちまへが餘所へ行くのに、わしやこのまゝどふしてもいなれぬよつて、花に行くなら行く所までわしやちくつて上る、そしてまた直ぐにもらいにやるよつて、戻つておいでや、何處から呼に來たのじや、大がいなら斷りいふてやりんせ、どうしても行くのなら、わしや入口に待つてゐるぜ、エこれ、ワンくくく、

油あぶらたる「わたいわ今夜揚先よるあきさきで行くいのじやよつて、どうしても戻りもどりやせんでエ、エいうるさい、何なにじやいな、人のからだへねばり付つて、アタこあろのわるい、そんなとせずど、早はやよいんで坐敷ざしきの骨ほねでもせしつておいで、ア、きらひ、何處どこまで來きるのじや、まだるのか、氣色きしよくのわるい、シいく、

盲くらににえ茶ちや

「こらおのれは何時いつでもどこん性せうのわるいこと吐はすが、今仕いましかへししてやるは、サア着物きものを脱ぬげ、脱ぬがぬとソラどぶじやこたへたか、
めくら「これくア、あついく、おれをどうするのじや、あまへは目めが見みえぬ人ひとかそんならさうと先まへ言いふてくれると、覺悟かくごもするのに、何なんともいはずに、こんなえらい目めに合あして、どんと盲くらににえ茶ちやあぶせるやうな無茶むちやして、向むかふ見みずめが、

目めから鼻はなへぬける人

「むかしから忠臣ちゆうしん義臣ぎしんもたんどあるが、大星おほほし由ゆ之の介すけほどえらい人ひとはない、これ見ておくれ、アいたいくどどぶするのじや、此こどふりに目めからはなへぬけ通とほいてじやがナ、此こ春はる文樂ぶんらくの芝

居で累の幽靈が燈籠ぬけは見たけれども、由良之介がはな拔は是が始めじや、

由良之助「かたきけ用心きびしき高の師直なれば、一通りの謀略では本望が達しられん、そこでいろ／＼と智恵をくり出して、敵が悟られんやうにせうとおもふと、此通り目から鼻へぬけて見んならん、エ、何じや、こんな鼻なら直ぐにぬけられる、穴の中は涕でする／＼じや、こりや一方で九太殿が駕籠ぬけよりは、よつぼどぬけよいテ、

木ではなくゝる

「イヤお出たか、又おまへ所の息子のとか、モウ勝手にするがよい、どちら道一べん焼てこんどいかんよつて、まアそのつもりしなされ、ハイさよなら、まア一ふく喫ずと早いにか、わしは今此通りに木で鼻くゝつてゐるゆゑ、手がはなされん、そちらでどふなと相談しておくれ、ハイ、

眼面の節穴

「何じや、太い字が書てあつて、その隣に細い字が書てあるは、これを読むとえらうひまが入て邪魔くさい、何のとじや、さつぱりとわからんが、わしの目け節穴じや／＼と人がいふけれ

ど、節穴なれば覗いて見られるはずじやが、何で此やうに何も見えんのじや知らんテ、

客をのぼす仲居

「まあわたし所へ来てやお客もたんとあるけれど、あんたのやうに程のよい、きれ放れのよい、男まへのよい、工合のよい、つとめよい御客はほんまにありやせんでエ、そこで藝子さんでも、娼郎でも、あんたでさたあ子は、何がなしに惣てじやよつて、どこのおき屋の一階でも昔からふてのろけてみますぜ、サアもつとたくりますよつて、精出してあるだけの金出してしまふて、尾ふりなされ、さうして骨ばかりになつたら、紙屑籠へ入て上ます、

のぼされた客

「ナアかうしてのぼせ上る時は、のぼつてやるのが客の粹といふものじや、ソラ〜、もつと糸を出せ〜、こりや〜、さう一べんにたくつてくれると、此節季一べんに糸が切れるは、もつとのぼしてくれ、天までしてやるは、そこで尾ふつて、ひつくりか〜つてやるつもりじやテ、

樋で庭はく仲居

「あんたなんで顔見母なはらんのおんじや、ひよつど何所ぞち悪いことけおまへんかとおもふて見妙さんで御くじ上たり、辻占見たり、御醫者さん呼んで來たりして、待ておましたがな、小菊さんも毎日くたづねに來て、エラこがれであます、サアおちよぼどん、御茶くみんか、コレく煙草盆でそこらをふいて、雑巾に火入て持つていきんか、オ、きらひ、わたしはあはてて樋でははいてゐたがナ、何でこんなすかたんするのじや知らん、オ、をかし、

金のつるに付

舞子「ねエさんがいふてもあつた通りに、何でも此あかたを放さんやうにせう、

口味噲付る人

「何じやあきよどん、えらいいそかしいな、コレくそんな味噲のすりやう仕たら、皆ふちへついて仕もふがな、ドウあれがするのを見て置、ニ、何といふのじや、おれに替すれといふのか、ア、えらいことした、どうど口みそ付たがナ、

人を出しにする

「コレく喜介どん、座敷から呼んであつたら、おまへが用事があるといふておゐておくれや、悪いか小座敷へいたといふておくんや、モシ吉さん、寐てかへ、まアちよいと起なさんか、何でおまへ顔見せてやないのじや、あのナア明日ひがん参り仕なはらんか、店の手まへは東のお客を出しにつかうてやるよつて、エ、えいか、ア、水くさやア、

人を焚つける

「コレ治兵衛さん、お前もおまへじや、人のいふとをほんまにうけなさんよつて、皆が馬鹿じやといへますがな、今度のはなしなどは、丸で向ふの手段にかゝりなかつたのじや、又久七さんも、そうかと思ふてゐなさんが、えらい可笑い、まア二人ながら、よいどしして、あんな人らに十兩も金取られるといふとがあるものか、阿房らしい、今になつて皆くすぼつて、まるで阿房の數が知れん、もつと氣をもやしてあつなりなされ、ワウ、もつともやして上ますよつて、久七さん、もう一ぺんあたまた突込なされ、

人をにやす「そんなら法善寺前で待つてゐるぞ、えらいく、大分うまい加減じや、どうど紀え

て来た、

附 燒 刃

「ちつと無理な仕事だが、何も金づくだからしんぼしねエ、たかで二三度間に合たらそれでいいのだから、初手になまくらと見こまれちや、仕事にならないヨ、サアもう天晴の業物と見えるから、さが直ぐに斬れるか、斬れぬはこれからがおめへの心次第ヨ、どちらとも今夜の磨にうまくかけなせエ、きずでも出てはつまらぬエが、それももとくの仕事だヨ、
 娘「どつさん、さうひどく打つたら、またはがねが裏へ廻りやせんかエ、

自 腹 さ ぎ る

「ア、われ布子を殺したこと方々の恥辱とあれば、一通り申ひらかん、兩人とも聞いてたべ、ヤ、夜前本家の彌五郎殿に御目にかゝり、別れて歸る夕まぐれ、腹へる人に出合ひ、二ツ山にて呑喰、うちよつて懐中見れば、財布はからでたのむ人、南無三方あやまつたりと 持合せはないかと懐中をさくり見れば、財布に入たる此かね、見ちがうた事なれども、天よりわれに拂はず金と、直ぐに出しおき、彌五郎殿にかの禮をいはし、立上つてよくおもふて見れば、持

合せたるはわがふせう、かねは布子をうつたかねじや、こんな阿房らしい自腹切た事がない、

からけつ

「こうちよつと見でくれ此通だ、おれらの錢を取ふといふても、此頃はさつぱり工面がわるふて、見せた通のからけつじや、何ぞよい模様かあるなら知らしてくれ、もう一べんどうか着なをすつもりじや、

膳の上一ばいになる人

「何にも人にふれまふてもらふのじやなし、おれが錢出しておれが喰ふのに、誰にも遠慮することはない、大きな顔して喰てやるのじや、かうした所は汁も焼物も飯も、皆おれの物じや、それに此やうに膳の外で喰うとはない、逆ものことに膳の上へ乗つて、ゆるつとやらうぞ、ア丁度膳一ばいになつた、

首ながふして待つ人

「どうじやいな、何時まで待してくれるのじや、小便に行くといふても、大概ほどのあるもの

じや、モウ夜半過ぎて来たがナ、最前から来るか〜と思ふたひに、首が一寸延び、足音がするど二寸延び、此度はさうかと思へば三寸延びして、今ではこの通りに天井へつかへて来た、こりや朝まで来なんだから、家根つきぬけて天までとくか知らん、何でもこゝまで長なつたらじや、横にこけぬやうに壁にでもたしておかんならんテ、
 エ、いまいますしい、どうしてくれるのじや、ア、しんき、

犬の手も人の手

「いぬもしたんなおいそがしふりませうちいとわたくしもてつたいませうがさかなのあらがあるならばやくおだしなされわたしがすぐとさんじませうハン〜」

脊中に腹

「エ、いまへましい、此冬はどうだかさつぱりとなりやつてしまつた、何故こんなに手があはねエのだらう、モウあとにも先にも一枚しかねエ布子だから、實て是で正月をせうと思つたに、今朝の米がねエから、又ぶちこわしたが、つまりねエ、寒の中に浴衣一枚だハナ、オ、寒くていけねエが、しかし食わずにやゐられめへから、どふせ仕方がねエ、これ見てくれる、せな

かに腹だハナ、

飯蛸にばつち穿かす人

「何時でもこちの人がいはんすには、おのれは飯蛸にばつち穿かしたやうな、埒のあかんやつじやといふてじやけれど、ついで飯蛸にばつち穿かして見やうと思ふて、ばつちを出して見ても、蛸は足が八本あるし、こちの人は足が二本ぢや、中足入れた所が跡五本足らんよつて、方々のばつちやへいて尋ねても、どんど足が八本入るばつちの仕入がないといふよつて、どふやらかふやら内で縫て見たが、こんな穿かしくくいものはありやせん、ア、きらひ、又こちらの足が扱た、エ、もうそのやうにぐにやぐにせずと、しつかりしなされ、ソレそこへ二本入たらどむならんがナ、何じやとてくして、オ、しんき、モウ日が暮れて、また今朝からこれにかゝつていたのじや、今日はもうやめにして、又あした朝早うから穿かして見よ、

前後のわからぬ人

「きのう本家の若旦那に急に届けてくれといふて、北の新天地から手紙が来たよつて、直にもつていた所が、御店に親旦那も別家衆も并んでいて、そばで若旦那にその手紙を渡したら、

今出て来てあのれはあと先のわからぬやつじやといふて、えらう叱られたが、どこでもそない
 といはれるのじや、ホンニかうして見た所は、何がなしに背さかさまに成てあるのじや、何で
 こんなわからんものじやしらんテ、

鎗を喰太夫

「ナア鎗も始て喰された時は、吃驚して氣が上ずりになつたが、今では喰つけたよつて、何と
 もないが、かうして見ると、やりもうまいものじや、

飯にもたれた人

「ア、どひやうむむない腹の工合がわるい、わしやこゝのうちへ来る時に、晩飯を喰たといふの
 に、何じや無三向にすゝめるよつて、まんざらどやされるやうにもなかつたので、又三膳ほど
 やらかしたら、これ見てくれ、此通りじや、どふど飯がもたれて來をつた、エ、イゲフウ、こ
 れさばつりどむならんがな、さうもたれたらかなはぬ、ゲフウこれさつばり、どむならんがな、
 さうもたれたらかなはぬゲフウ、一べん雪隠へ行きどうても、どだいこのどほりで立ことがで
 けん、ア、ゲフウエ、イ、

あたま割

「サア、もう喰ひなさつたか、みな覺悟してゐなされ、よいかエ吃驚しなさんなニ、サアわりますぜ、一人前に壹歩二朱と二百六十六文ヅ、じや、

○「えらい災難じや、こんなことなら鉢巻でもして來たらよかつた、

△「これじやよつて、こゝへ來ずに外へいきなされといふのじや、こんなどぎついあたま割くはされると、しんからこたへますは、

□「わたしじやとて大抵いたいことじやない、今更ばやいても吐き出さりやせず、かうなつたら仕方がないこゝに持合したのは、親方の物じやけれど、出しておきます、しかし何でも明日までに、此あたま割をもとゝにしておかんならん、さうしておかんと跡にえらい疵が出来ます、

親の光り子に目鼻つける

「こりや寅松よ、われのやうな横着者を、又してもつかふてやろと、先方さんにおつしやつて下さるのは、皆おれがかうして目鼻つけてやるよつてじや、何時でも小遣錢を盗みくさつて、

戻されてうせるが、ちつと性根しやうこんをすゑてしつかりせう、何でも皆親みなおやの光りじやと思ふて、大事たいじに つとめうぞ、よいか、ソラ今鼻いまをつけてやるは、口くちもいろくあるけれど、はじめは小さい口くちがよい、大口おほくちは手てがつけにくうて、あとつさんでもまだ形かたがつかずにあるは、オ、しもふた、こりや貴様きさまの知らぬことじや、これはおれが借錢しやくせんじやテ、

目はな付けてもらふ子

「これく爺おやさん、外ほかはどうでもよいが、目めだけはあんじやうにつけておくれ、此間このちかたも御店おみせの番頭ばんとうさんがいふてやのに、どだいこんな間ぬけ者ものを問屋とみやの奉公ほうこうさすといふのは、おまへの親おやの目めが違ちがふてあるといふてあつたぜ、

二十歳後家は立

こちらの御方おみかたが死しでから、人がいろくといふてじやけれど、そんなことがあつても、男おとこはもちやせん、かうして後家ごけで立たけたれば、たとへ此身このみがさを竹たけのやうになつても立通たてとおさんと、死しんだ人に身み棹しざうがたゝぬ、

毒喰ば皿

マウまるきりやめて、さつぱりせんと思ふたけれど、かう見てからは、喰ずにゐらりやせん、元が飯より好といふやつじやもの、此單物ぶち殺しても、一人前はやれるよつて、エ、まゝよいけく、ア、モウ單物半分ほど喰ふてしもふた、かうなつたら、やけすこじや、ねこそげ皿まで喰てやるは、

人の口には戸立る

今日日本家へいて買物方が見んうちに、油二升と蠟燭二斤はちよろまかしたが、明日は何でも米を一二斗は持つて戻るつもりじや、それよりは隣の十兵衛は兵庫へ下つたか知らんて、さうじやど何時ものやうに、せんぢや裏口で黽の色事見たやうなことせずと、どうじや知らんて、オット様が明てある、ドレく人の口に戸立ませう、

倅に重りつける子はかすがいに首かせ

モウこれこちの姉も、四五年すると片づけんならんが、賣てそれ迄には、荷の三荷ぐらゐる持し

てやりたし、又真中の坊主も、手習やへはやらんならず、それ思ふと、半どきもうかゝ暮してゐる間はない、ア、やれ、三人の子供に賣られて、おれが首もまはりやせん、エ、どうも仕やうがないワ、マアいくどこまでいて見たら、どうなどならうぞ、

山を張る人

「おなじ山をはるのならば、一かばらで大きな山をはつて見んと可笑ないよつて、此通りに富士の山をはりかけたが、もどがからけつ籠細工といふもんでも、表の景氣が立派にないど、どむならんと思ふて、こゝまでは仕上たが、どうしてもモウちつと元手がないと足らんじや、またこんな所で穴か見えては、さつぱりと山のはりこたへかない、エ、まゝよ、このまゝでこけたら、またこゝを籠ぬけくはしてやるワ、

目玉喰ふ丁稚

「ヘイ、もうよろしうござります、ヘイあんなの目玉は、常時喰ましたよつて、えらいきらひふなりました、モウすこしでよろしうござります、お目玉も折にちよつとはしんぼうでけますけれど、あんなのやうに、毎朝々々日に五へんも六へんも喰れますと、一寸も咽へ通りませ

ぬよつて、尻へぬけるより、口から直ぐに吐き出してしまひます、ヘイそしてあんたの目玉は此頃のあんころ餅と違ふて、毎日々々喰たびに大きくなります、ヘイ〜澤山でござります、

お目玉やる親方

こりやく、おのれは何と思ふてけつかるのじや、申職ばかりしくさつて、何とする積りじや、又してもおれが目を盗みくさつてこれほどおれが目をくわしても、そとで買ぐらひ洒す極どうめ、モウちつとは性根に入りさうなもんじや、サアイヤでも、もつと喰らへ、何でもこれからはこゑ上るまで喰してやるのじや、どうじや目玉の味覺えたか、

男は當つてくだけ

「モウ何も言分ないが、「われもこれでよけりや、おれも是で氣が濟のじや、「さふじや、いふこといふてわけさへ立たら、根も葉もないといふもんじや、互に腹に持てゐては、いつ迄も晴る所がない、もうこの通りにあたつてくだけてしもたら、これから兄弟分の盃せうか、「さうするかゑい、しかし一寸待つてくれ、おれのあたまたの片が一つ足らんが、貴様皆揃ふたか、「まあ一ぺん合して見るけれど、若し足らん所があつたら、最前寅こが此喧嘩を預ろとい

ふたよつて、ひよつとしたらあいつが、持つていんだも知れんで、

親の面に泥ぬる息子

コライイあんまり親々と、どん／＼ぬかすない、われの世話になつたはナ、十二の春までじや、それから奉公に出し、さうして小遣錢も碌にあこしあがらんよつて、どうで親方の物も盗もかいそれから道落して、十年にもなるけれど、われが錢は一文もくれた事はない、皆おれがだましたり盗んだりして、こゝ迄大きなたのじや、こらきよろ／＼ぬかすと、是から親類や近所中へいて、あばれさがしてやるぞ、其時見てかほへづらせんやうに、今から面へ泥ぬつてやるは、目ふさいて見てけつかれ、オエ、やれ／＼なさけないなんでこんな奴がでけあつた知らん、こりやわれゆゑにナ、世間へわれの顔が出されぬわへ、モウ賣ての事じや、こゝらにゐるぞ、どこぞ遠い所へいてくれ、コレ／＼サア何も見えぬやうに、目の中もすつばりと塗つてくれや

手のないうち

わしは何でこんなしんどい目をするのじや知らん、一本の手は子守してある、一本は米買にかんならず、晝は餘所の洗濯しにいてあると、夜は按摩に出て行くし、爰なうちへ来てから、兩方の手がむつとからだについてゐたことはありやせん、そこでこのやうに手なしのずんべらぼんになつたが、しかしいつそかうなつて見ると、毎日うちでしりくり舞のに、邪魔にならないでよいは、

わるずれにすれた人

上るり端歌江戸歌新内祭文、二輪加物真似落し咄し、ちよんがれ何でもござれ、おれほど替古した者はないデナ、そこで内は廿五の春たゝきあげて仕もふて、ちよつと幕内へも、半季ほどは入てゐたよつて、芝居のとは殿中の師直じやないが、イヤサくろいといふやつじや、それから又一年ほどは、南地と新町で大こ持も仕て来たよつて、娼妓の魂膽お茶屋の内證は、さつぱりと見抜たといふもんで、人もおれのやうになると、わるくうすれてどつと相手にするやつがない、モシ／＼此本の御見物さま、人の穴をいふたり、洒落過ぎなさると、わたしのやうなからだになりませ、

燈明の火で尻あぶる人

えらう寒なつた、今夜はどうぞして、布團を二帖ほど手廻さんならんが、こうつとアノ伏見のおちき所は、今年綿をたんと作つたといふてだが、あいつをもちつむいでをつて布團にせう、しかし何ぞ生産をたんと持ていかんと工合があるが、何ぞすき物はなかつたか、オ、そしてあの人は魷が好じや、丁度よいは、此頃は魷の匂じやよつて、今から木津川へいて釣て来て、それを持ていこうか、ア、しもた、こんな思案してゐる内に、モウ日が暮れて来た、是ではとても今夜の間に合ぬ、オ、寒む、ドレ燈明でなど尻あぶつて、モウ一べん思案仕かへて見よ。

諺臍の宿替卷之三終

臍の宿替卷之四

女の芝居行

これ／＼なんぼ氣か急くといふても、そのやうに首ばかり向へいた處が、肝腎のあいどが跡へ残りては、坐る事がてけんがナ、これ／＼待つておくれ、オ、せはしないかに見に行くものじやとて、裾から下を残して往て、ひよつと最負の役者が惚て、色事でも出けた時は、どうする積じや知らんて、腰より上かいふ「モウ早ウいかぬど、序の幕がべりますよつて、此様に氣がいらつて、首ばかり向ふへ往ますのじや、これ／＼お前もそう落ついて居ずに、早歩でおくれ、オオしんきや、モウそないにくづ／＼するのなら、こゝから家へいんで待つて居ておくれ、そうすると、一日小便に立世話がなふて、寛りと見て居られる、

尻に帆かけて走る下女

モシ／＼いとさん、あなた様の様だからだを別々になつて走らずと、私の様にかうしてお出なされ、朝の内は北東風が吹出すよつて、心齋橋を南へ走るのなら、是れ此通りに尻に帆をかけ

て行のが、いつち宜しうござります、何でも戒橋を越えたら、梶を東へまけますのじや、ア、えらい事しました、あんまり走つたので、お腹もお辨當もひつくり返つた、

鯖の生腐り

ア、しんど、何でもあれは足が早いよつて、一時も早う大坂へいけといはれて、夕からは通り足三本で走て来たが、間に合か知らん、あんまり走つたので、腹腸がひつくり返て、さつぱり腐てしもある、あつとどつこい、そんな顔して見られては、誰も遣ふて呉やせん、何でも勢ひ見せんとどむならん、ハイ、鯖やよろしう、

客を喰へてふる姫

おまはん何じや、能わたしを呼におこしなさつたナア、なんぼわたしの様なからだても、おまはんの様な素寒貧に相手に成てあるひまは無デヘナ、何でもえらさうにたつたあれ丈のでけんのが苦しがり、夫にまわ面の皮の厚い、呼におこされた事じや、エ、腹の立、わしらが喰へても、此通りにふられる軽いからだして、あんまりばんくいふてあくれナ、かうした所は、野田の下り藤じやない、みその下りふちじや、ユレ、さうしてくれいでもよいがな、あれでも

頼れたものじや、持つて來たいけれど、實は錢がないのじや、モウ其様に振て呉てもなぬ奴は、どこまでもないのじや、ヨイ／＼腹も財布もこの通り、テレックテレ／＼、モウかんにんしてくれ、

幕切

サアもうよい加減に起んか、あんまり臺辭が長いと、又互にあらがでるぞ、モウ／＼だんまりにしてくれんか、サアあれかあんじやう立廻りつけて、幕切にするは、チョン／＼、

えんの綱の手切れ

娘「もうそんなら思ひ切りますよつて、どうぞすつばりと切れておくれ、龜さん、あんた大きにお世話さんでござります、どうぞ又吉さんとすつばり成ましたら、あどの事を宜しふお頼み申します、こんなこと誰にも云ずとそつと切てお呉れなさい、中人「あつとよし／＼、お前もどふで深い約束も仕たなれども、かうして親に心配かけては、やつぱり未の爲にわるい、又こんな太い綱で結んだえんじやもの、あれじやとて誠に切にくい譯じや、どうで二人ながら切にくからうが、是迄の縁と明らめてゐるが可い、サアよいか、今切るぞ、フシ／＼、男「龜さ

ん、こんな阿房らしい事はござりません、今迄わの子にだまされたがくやしふて、どうも友達に合す顔がござりません、どうぞ早う切てお呉れなされ、何も未練はござりませぬ、こんな色事ならせん方が宜かつた、

女夫喧嘩犬も喰はぬ

同中に立たはしら

男「治兵衛さん、ほつて置てお呉れなされ、こゝなどたふくめ、おれが勝手におれが銭つかふのじゃ、我が世話になりやせんは、きよろ／＼とサア出て行くが、私が着物皆こゝへ出してお呉れ、あんまり、ナ、こんな内に居たい事はない、サア出て行くが、私が着物皆こゝへ出してお呉れ、あんまり、ばん／＼いひな、男なら男の様に、かけの斷りや米買錢のつもりをお前かして、節季に逃あるかぬやうにしてお置き、甲斐性なしのへぼくちやをどこ、ばん／＼いひな、

中に立柱「これ／＼モウよいかな、これはまた困つた物じゃ、太兵衛もあるい、お内儀もひつこい、どちらも尤じゃ、モウ止んか、サア宜かな、分つてある、二人がさういふてくれるとあれや去にも去れず、是見てくれ、裾が柱に成、

犬「何じゃ、又初まつた、あんな事ぬかしては、おれに喰そと思ふて、おたの申します、又中

なをりするつもりじや、ドレ門へでも行ましう、

臍が西國する

わしのお婆は九十三で、十二になる子と情死して死んだが、それから爺さんが血の道で死んだし、お嫁が吃驚して金玉がつり上て死んだじや、そこで皆がこんな可笑い事はないといふ、わしは西國に出たが、外の臍は皆やどがへ仕てしもふた、

下から這てくる客

へい御免、えらいお邪魔さんでござりますが、其筋を一寸お見せ下さりませんか、又腹も少しばかりおもらい申したうござる、モウどこに聞ましても、あんたさんの腹筋や無程が賣ませんと云ふて教られて、遠い所から此通りに這て参じましてござります、どうぞ御如才もござりませんけれど、外へお賣なさるより、おまけ下さりませ、然しお引合に成ませすば、如何様でも苦しうござりませぬ、エへ、これは御面倒致します、一寸お見せ下さりませ、へいモウ腰掛ませいでも、下から這ておましても分かります、

腹うり筋うし屋の人

どんな筋が望みでござりまする、長歌チヲカラの筋なら、三筋有のでござりまする、又金持筋なれば、大分大いのでないど、どむなりません、又遠ひ所から賣と恩召す筋なれば、此長いのでないど、先へ届きかねます、腹も御入用なら、どんな腹でもござりまするが、最近年は方々に紛らはしき店が出まして、うけにくい腹を賣たり、わる腹を賣りますよつて、私方のやうな腹の能いのが、阿房じやの援間じやのといふて、どんと賣れません、然しあんたの様な程のよい御客は、御ひいきにあつしやつて、御求下さります、へいへいお負申します、毎度有難ふ、どうぞ又御頼み申しますなど、甘く腹を賣る男なり、

男やもめにほろが下る

こんな事なら、あいつを去さんなら能有たど、初手から己は思ふて居たけれど、みな自惜みや、これ見て呉れ、着物物は着たなりでふくるべ次第、破れ次第、汚れ次第で、寝ても起ても、一枚じや、かうじて見た處は、どんと荒布の化物じやが、エ、まゝよ、むさんこの繼の當たよりましかへ、

女やもめに花が咲

お松さん、お久しおますナ、聞てお呉れなされ、私も先度から上町の人と分れ、今はお蔭でほんよいお方にかゝつて、是見てお呉れなされ、此通りに私や花が咲て、モウ内でも毎日々々三味線弾たり、舞もふたりして、ほん揚氣に暮して居ますよつて、どうぞ花の散る間に、竹さんも一所にお弁當してお呉れなされや、

尻から元る啜つき

へい旦那、御機嫌能うござりますか、私もちと錢儲に掛りまして、先日から松前へ下つて居りましたが、漸々夜前歸りました、お蔭で三箱ほどまふけまして、御土産も澤山ござりますけれど、まだ船が着きませんよつて、いづれ目に掛ります、エ、何とおつしやります、へいあの積で参じました物は、餅と棒鱈と混布とでござります、ア、イ、エ今年は彼地に日照が續きまして、餅や昆布が畑に一寸もでけませなんだ、アハ、ハ、時に中の芝居はえらい入でござります、旦那「今朝番附くばりで、明日が初日じやナ、オイ申したつけ、どれく早ういませう、何じや、背中や尻が剝けで來て、もうこゝに坐つて居られんやうになつた、

い が み

今夜は宵から大分拍子がよい、どうぞこの鹽梅で明迄には、どつしりとした仕事が出来たいものじや、あれも子供の内から、手か長い〜といはれたが、手の長い計の盗人、昔から有ふれてあるじや、そこで今時は新工風でなければ、金儲が出来ぬよつて、長い手の先を此通り鍵にして見てがこいつで引掛ると、メラ〜浴衣でも何でもうまいものじや、しかし飯くふのと雪隠へいて、拭く時にはえらい工合がわるい、

階子酒で虎になる

ケフウ〜、えらう酔たぞ、エ、イ宵からは是で丁度階子の四ツ目、どうじやえらからうが、何にも酔ていやせんで、エ、イ憚ながらこんな酒でへげたれる様なおれではないゾ、ケフウさう家をぐる〜廻したら、どむならんがナ、何じやおれが虎になつた、サアやくたいじや、又内から和藤内が来るよつて、ひよつと來ても、こゝに居んといふてくれ、

鯨になる辨慶

イヤアこれは但州、これからモウ一べん西へいて呑直しはいかゞ、私御供致しませうか、何でも此辨慶が閉口するまでやるのなら、五條の橋ごと出かけんと、めつたにやあじきはいたしませんテ、一寸是から北の瓢箪屋、どつこいそいつは大禁物、ぬらくら鯨がどめたゞ、これはどつこいしよ、

八百屋見せ出す人

ゑらいづゝないケツブ、エ、イグロ、ア、こわや何じや、作り身の大根に、たき出しの竹の子、大平の早松茸に、吸口の柚に茶椀蒸の百合、根がそのまゝで出たは、ケフウ、エ、イ、是では青物ばかりじや、ア、づゝない、まだじや、どちら道出すのなら、八百屋店では銭嵩が上らんよつて、是から肴屋店を出そか、エイグロ、其様に皆鼻押へてるぞ、もつと買てくれんか、グロ、

口繩の生ころし

左様じや、どつとさうじや、お前がいふ通りじや、誰が聞ても無理は無い、御尤、さうじや、あれでもさうなつたら、どふも仕様があるまい、そこ一宜しう私しや私丈の了簡があるよ

つて、どちらでも思召次第何ともいひません、然るべくやう御勝手に御隨意、アハ、など、ぬらくらいふてゐる、口繩の生殺しといふ心の悪い人なり、

のうれんになる内股膏藥

相手「コラ分らんじやないか、何も人の中で己に耻かしくれる事はない、ありや聞んど、吉こ己が無理か、どうじや、のうれん「サア分つてゐる、誰でも錢のないのはつらいもんだ、フンくさうく其通りじや、そんならおれらと違ふて、今日其錢がなけりや、どむならんといふ向のうちじや無、さういはれると腹か立も尤じや、相手これく「お前迄がさういふて呉てはどふもわからんがな、まあ是迄何遍おれをだましくさつたか知れやせん、サア今日は裸にしても、持ていにます、吉兵衛さんお前御苦勞でござりましたモノ、退いてお呉れ阿房らしい、のうれん「まあ腹立たすやうな、ばんくした事いふよつて、おこるのじや、サアよいわいな、おれがも人を腹立たすやうな、ばんくした事いふよつて、おこるのじや、サアよいわいな、おれが知てゐる算用さすは、此辛い時節に貸た物取に在るやつは無い、ぐつといふて取て仕舞なされ、だらくいふていたら、どむならん、是々さう兩方からひつばつて呉ると、股ぐらの膏藥がめくれて來て、そこらぢうひつゝき歩くがナ、

肩から爪に火

かうして歩行てゐても、菜の五文や十文は落てある、それを拾ふておくど、晩菜買事が無いじやテ、然し草履が切るけれども、是は又切屑や紙屑を拾ふて、内で小燃にして、おれが作るのじやよつてに、錢はいらんじや、さうしてこのやうに夜歩行ても、肩の爪の明りで蠅燭がいらぬテ、

孫を引延す婆

わしも今子息が居て呉ると、卅五になつてゐるよつて、もう樂して居られる身躰じやのに、こんな奴を置いて先へ極樂參りをしたばかりで、何時までもしんどろ事じや、夫に又此孫めも爺親がないと思ふと、かわいして、これ私の目も鼻も無いやうになつた、もう一日も早く此子を大きくして、どぶぞ樂をせうと思ふて、毎日々々此通りにして、引延してゐますが、見てお呉れなされ、大分長う成ました、

尻の長い嫁

あきやん、是から飯たきやんか、あまはんどこは何はたきやんじや、アノわたいとこはナ、喰
 る人がたんと有日と、又少ない日とあるよつて、程らいがしれへでほん難義てエ、あまはんき
 のふ芝居へいきたか、入はえらいかエ、今あまはんはほんまに樂じやナア、それ思ふとわたい
 は賊につまらんでエ、一日ぐしゃぐしはれて風呂へ行く間もありやせん、モウ晝になつた、
 何でわたいは何所へいても、こないにお尻が長うなる知らん、

つかんで丸くする人

「サア何もごてく云事は無がな、あれかよいと云たら、もう能てはないか、コウ吉よ、あれ
 にまかせ、あれが云といふたら、どちらにも引どらしやせんは悉い、コウマアあれかする通り
 に、丸うなつてむつとしていし、コラ虎公も言分んはあるいかな、手の中の人「そんなら入よ、
 ありやうも何も云んは、貴様に任すよつて、顔の立やうにしてくれ、其代にありう顔立て、
 此通り丸うなつてぬぞ、又一人「こりやア我ばかりじやないは、あれも見てくれ、此通り丸ふ
 なつてゐるは、入よ、我に任すからじや言分ないは、然しもちつと指を寛めて呉れ、腰が痛く
 てこたへられん、これくさうしたら貴様の手の油で、どうやらあれはすべり落さうな かう
 した處は、とんと勘彌手まりと來てけつかるは、

丸い人には角がつく

丸い人「成程どつとさうじや、そこらでぐつといかんならん所じや、私しや向ふ云ふのは、皆はんまじやと思ひまして、モウその位なら辛抱せうと思ふて居たが、あなたの云なさるのが妙じやな、兎角私はこんな丸い者じやよつて、萬事御頼み申ます、サウさうだらうが子、どだいおめへが丸こい人だから、向ふのすきにさられたんたはナ、夫だから今あらが云た通りに、向でも構ふ事はない、直ぐどより込にいきませい、所で先が何んとか云たら、あらが出てぐつと物にしてやらあ、此位の臺辭を額銀二つ計で承知がたきるものか子、少くとも江戸金五兩にやせにやならねエ、馬鹿らしい、おまへの様な意氣地のねエ丸い人を見ると、あらがからだ中がめりく筋張て、是見なせい、こんなに四角ばつてしもうた、

嫁に巻れる人

おまへ今日どこぞへ行のかエ、モウ止なされ、後月にも半日出ておめで、ちつと内にめんかいナ、吉さんが誘ひに來ても、今日は行事はならんぜ、其よりはお前飯たきつけて、一度按摩さん所へいて來てお呉れ、私はえらう逆上てどむならんよつて、是から暫く寐るでエ、飯が出來

たら起してお呉れ、えいか何じや、此髭は丸で阿房見たやうな、夫「そんならもう行はせんがな、わしは何にも行たい事はないけれど、誘れたよつて往ふと云ふのじや、なんぞわしが行氣でも、お前かかうして巻れてからは、闕一寸外へも行りやせん、サアわしが飯たいてやる、寛りと寝なされ、

這出の女中

これサお前も大坂さんへいて奉公さんすのか、わし小豆島からこれ見てくんさい、此様に這て出かけたが、何でもコレサア大坂様、でつかい廣ひ所でござるのう、どつちからが西か東か分らぬからの、上這て來たもんじや、さつぱりと分りません、わし往先教へてくんさい、

口のない女中

姉さん、お前も大坂さまへ奉公に來さんしたが、わしえんやらやつと來たが、見てくんさい、此様に口の無ので、まだうろついてゐるだんべ、そこで爰な内へ來れば、口がたんと有と聞えげに、能ひ口がないかと這て來たんべ、

あたまのかたは親父

そりやお前まへ大きにも世話せわでござりますが、私所わたくしどころは當時このころの時節柄ときせうがらでござりますよつて、中々なかなか寄進ぎしんなどは、三文さんもんの事もよう致いたしませぬ、又御世話またおせわも致いたします筈はずなれど、そとへ出でますと、何れ五文ごもんなり六文りくもんなり、錢せんが入いりますよつて、萬事ばんじ共に御斷おことわり申まします、マアお前まへ一服いちふく喫くんで早外はやほか様御頼さまのたのなされ、エ、いや／＼錢出せんだせといはるゝと頭痛づつうがして、頭あたまが此通このとほりに重おもうなつた、これ／＼長ちよう松まつよ、按摩呼あんまで來こい、ア、それでは又錢またせんが出るは、貴様きさま二三篇さんべんたゝいてくれ、

尻しりのおもたい親父おやぢ

さう云いはずに外の事ことじやない、お互たがひに年寄としよつて、お寺てらの事ことならお世話せわなされ、あんた方がそんな事ことおつしやては、外ほかさんがどむなりません、責せめて二百疋ひゃくひき文もんなどお上あなされ、御不承知ごふじょうちカナ、ア、モウ晝過ひるまぎになつた、八文はちもんの煙草たばこ二つも喫くでしまふた、モシすこしなと上あておくれ、さうでないど、私わたくしの尻しりも此通このとほりに上ありにくいて、

味噌みそも翼よくもひとつ

イヤ是はく思ひかけない御馳走に成ります、あんたの味噌はえらひ美しい、お汗が誠に結構じや、あまへさんは稗島からお出のか、菜種はあつちがえらいよいと云事じやが、米もえいかな、肥取に來るのは舟でくるのじやな、モウすこしお吳なされ、えらいばゝの色じや、こゝ取「サア上汁入ましよう、遠慮なしにたべなされ、まだ表のたんどに二荷もあるわいな、

他の禪で角力どる人

サアあいでなせエ、何にしろ一番かゝつて見にや、勝負が分りはせん、随分あれも分かつた悪ひ物じやございませんから、マアカ一ばいおやりなせエ、萬事はわつきがお合手になりやす、萬一山子が當らいでこけた所が、わちきは元の裸だから何ともねエのサ、ハイわちきも此通り丸の裸じや、こつちが相手にしたくても、向ふに角力どる奴がござへせんから、御氣の毒だが何でもうまくのせるやう、どうか先へ五六十目ふんどしをつして下さいませ、ハイく御頼み申しやす、

爺

嫁

サアこちらの嫁が寝てゐる内に、どうやらかうやら茶も沸たし、お粥もたき付ておいて、水も汲で置たじや、モウあの人が起ると、ぐしやぐ云ふて、一日責られてゐるやうな、あんな氣取のしにくひ嫁はありやせん、こんな事なら今迄奉公してゐた方が能かつた、ドレ目の覺ん内に、髮結さん呼にいておかんど、又叱られる、

腕みがく人

おれの腕はどうしたもんだ知らん、なんぼ磨ても賞られる事でけんが、マア何かなしにこすれる程にこすつて見よ、どこぞでは骨や見えるだろ、

白鼠の番頭

モシ御隠居さん、若旦那は昨日からどちらへおこしなされたのでござりまする、今朝からまだお歸りじやござりませんが、餘所ではえらい噂が高ふ有ります、あんなのお目が長すぎまして、兎角すかたんばつかり見てあるでなさります、ちつとは又あつしやつても宜うござります、この又久吉は、何處迄いたのじや、朝出ると晝までかゝつてゐる、モシ晝のお菜は、人はどうじや存じませぬが、私は米粒と大根がよろしうござりまする、

目の長い親父

サア能いわい、わしが内もそなたが氣を付て呉るので、大きに安心じや、まだ忪も若い時は二度ないよつてに、ちつとづゝの錢も遣てあらうが、其も友達の附合なら有内じや、又若い者や子供も、どふで筆先はきをるのは、そなたが云ずとも、此通りにおれの目は顔より外へ出てある位じやもの、皆な目に引掛りてあるけれど、そこを長ふに見てやるのが、親方の慈悲じやテ、

草鞋はく丁稚

此間から使に行度このまゝに、三文の草鞋わらじはいたり、五文の草鞋わらじはいて、ためた錢かねを今朝けさから合羽かっぱして皆取みなとられてしもうた、待々まごもうかうなると少い草鞋わらじでこたへんよつて、此百こののうち半分取とて、五十の草鞋わらじをはいてやる、何じや知んが、あんまり大きな草鞋わらじはくと氣きが咎とがめて、人ひとが見てゐる様ようで、えらい工合くあひがわるい、まゝよなんぼ丁稚てんぢでも、今時いまときはだして使つかにいかりやせんは、

臍の宿替卷之四終

明治三十二年十一月二十五日印刷
明治三十二年十一月二十八日發行
明治三十八年四月二十日四版發行

定價金六拾錢

不許複製

校訂者 石橋助三郎

發行者 大橋新太郎

印刷者 野口安治

印刷所 翔鸞社

發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

東京市日本橋區本町三丁目八番地

東京市小石川區楢ヶ谷百三十三番地

東京市牛込區神樂町二丁目二番地

石橋思案校訂

校訂
落語全集

東京 博文館藏版